

花鳥諷詠選集

安原 葉選

入選六十句

特選五句

水害の跡に一本彼岸花

久留米 吉田 いずみ

秋晴の余韻は夜空にもありし

芦屋 村田 明子

隧道を抜け来る風の秋の声

芦屋 鎌野 光子

歓迎の心を卓の秋草に

小千谷 大矢 あきこ

生誕百五十歳とふ子規忌かな

神戸 田中 由子

二句短評

一句目「水害」は洪水により人命・家屋・田畑などがこうむる災害のことで、その程度はさまざまであるが、この句の水害は大水害のことであろう。その跡に一本の彼岸花、曼珠沙華が咲き出した痛ましい情景の句である。

二句目秋の快晴の日は空気が澄んで実に気持ちよく、日が暮れてもその余韻が残る。その余韻がさらに夜更けにも及んで、おそらく満天の美しい星が仰がれているのであろう。

- | | |
|------------------|-----------|
| 小鳥来る増築なりし幼稚園 | 伊万里 松尾 昭良 |
| 松手入大仏殿を見下ろして | 芦屋 長安 悦子 |
| 蜻蛉の澄みし目の玉空のいろ | 東大阪 中田 豪起 |
| 父親となりし子と酌む温め酒 | 福岡 深瀬 直治 |
| 十三夜ふる里遠くなりしかな | 神戸 牛尾 洋子 |
| 木犀や窓を開けある巫女の部屋 | 高松 豊島 禮子 |
| 栗の飯遺影の妻へ供へけり | 松山 高橋 草天 |
| 豊の秋父母丹精の米届く | 芦屋 北井真有美 |
| 子規の世の手縫ひのクラブ露けしや | 高山 大下 雅子 |
| 朝露を踏んで日課のウォーキング | 大分 鶴原 鈴子 |
| 闘牛や島一周の足慣らし | 鹿児島 青野 優子 |
| 蒼天へ消えゆく月を惜しみけり | 宮城 山家登志子 |
| 草引いて狭庭の広さもどりけり | 金沢 村中 久恵 |
| 酔芙蓉一日の盛り午後三時 | 寝屋川 岡西恵美子 |
| 脱稿のあとのコーヒー秋灯 | 香川 山本 照雪 |

大切に新米抱へ持ちくれし 横手 子野日さち子
 流木の乾きし影に昼の虫 太宰府 柴田慧美子
 夏の雨らしく一つ時窓叩く 稲沢 牧野 愛
 炊きたての新米供へ夫忌日 名古屋 内藤 信子
 秋草や六甲山の風透けて 芦屋 山村千恵子
 追ひかけるねずみ花火に闇騒ぐ 羽生 折原 秀子
 泥流を潜りし硯洗ひけり 鳥栖 緒方 輝子
 背景に染まることなき曼珠沙華 高松 岩瀬由美子
 待宵や明日退院といふ窓に 久留米 大日方美美
 戦火より芽吹きしといふ寺の萩 長岡 安井 里子
 古の遺跡の眠る草紅葉 長岡 榎本清津子
 継ぎくれし秋耕の畑土黒し 久留米 秋吉 鈴子
 隧道を出るや故里秋の風 広島 大井 正治
 虚子句碑に紫菀の影の高々と 阿南 かつせ千津
 秋草の中に径あり宇陀の里 柏原 鈴木 輝子

人形の胸もと少し菊を足す 刈谷 稲垣三千代
 父祖よりの一管を守り里祭 名古屋 山口 勝行
 泊りたる娘の手を借りて障子貼る 福山 池上 幸子
 畦道の狭まるほどに稲穂垂れ 郡上 小倉つゆ子
 爽やかや母校に立ちて講演す 浜田 大島一二三
 早世の母のふみ読む秋灯下 高松 藤岡 正子
 穂芒の赤艶やかに風を待つ 天理 山下美江子
 宿坊の朝餉なにより新豆腐 米子 中村 襄介
 煌々と満ちたる月の情かな 西宮 こうのしづこ
 天平の薨にかかる望の月 八尾 吉田 紗湖
 雨の日も笑顔崩さぬ案山子かな 西宮 宮本 露子
 ゆくりなき一会の秘仏秋晴るる 泉大津 山田 佳音
 子は未来吾は過去語る月の縁 伊賀 北村 みち
 一步づつ歩む晩学秋灯下 春日 牟田 節子
 流れゆく雲を映して秋の水 高松 南 美重子

●岡安紀元選

特選五句

幾重にも蜻蛉の空ありにけり

埼玉新井 あい子

読み返す文字の切れ目に虫のこゑ

山口松根 千代子

ファックスの吐き出す音を聴く夜業

神戸上岡 あきら

切り貼りに耐へし障子を貼りにけり

大分有松 洋子

楽しみの育つてをりし甘諸畑

西予三瀬 教世

二句短評

一句目——蜻蛉は百八十種もいると云われ前翅と後翅を別々に動かして浮いたまま止まることも出来る。群れなす蜻蛉が幾重にも空を埋め尽し、辺り一面が蜻蛉の天下なのである。そしてその先には青々とした空が広がっている。

二句目——読書していると、ふと文字の切れ目に一息つくことがある。「読み返す」と詠われているから何か心に残る書物なのであろう。文字の切れ目というそのわずかな間に虫の声に聴き入る作者である。

爽やかに生きんと励む余生かな 高知 海地 桂子
 名月や雲一刷毛も美しく 豊後高田 大波多美妃
 祝はれて齡身に入む誕生日 高知 前田まこと
 団栗を拾ひ窺ふ獣みち 金沢 広島 明臣
 良き事を秘めし今宵の温め酒 高松 鍋田 佳
 キャンパスの紅葉且散る年尾の碑 小樽 岩崎スイ子
 一日を思ひ出し記す夜長かな 南砺 岩城 未知
 すれちがふ顔はつきりと良夜かな 宮城 太宰裕四郎
 菊香る笑顔のまんま姉逝けり 神戸 大西美紗子
 灯を点し父母を待つ児に暮早し 北九州 篠原 綾野
 台風の逸れて安堵の雨戸練る 島原 吉田 章子
 歩かうよいてふもみぢの御堂筋 茨木 入江緋紗枝
 降る雨にくぐもり響く威銃 立川 宮本 裕子
 羽根閉ぢて一草となる秋の蝶 熊本 粟津 玲子
 秋深む師弟句碑にも地震の跡 久留米 坂井 順子

入選六十句

踏み入りて子らは花野の色となる 福山 久保 絃子
朝寒や厨の音を寝間に聞き 東京 大久保白村
おほまかな男の料理温め酒 島原 三好 立夏
法の灯のこぼるる庭や初紅葉 河内長野 橋本 佐智
彼の窓のまだ灯りゐる夜長かな 今治 横田青天子
大いなる山に抱かれ稲を刈る 高山 原田 尚子
それとなく付けて目に付く赤い羽根 大津 王仁 擘文
探しものばかりしてゐて暮早し 福山 貝原 玲子
じつと見る蝗の貌の真正面 伊賀 松村 咲子
水音にこころ解けてゐし秋暑 高松 村川喜久子
相席も厭ふことなき走り蕎麦 光 田村 文代
不確かなもの毒茸にしてしまふ 羽曳野 羽測 幸子
虚子庵の句碑より高き紫菀かな 阿南 田中 栄子
シンプルに生きる身軽さ草の花 福岡 黒田 純子
流木の乾きし影に昼の虫 太宰府 柴田慧美子

送り火の消えて一人の闇となる 伊賀 藤井 光子
帰る子を見送る路地や蚯蚓鳴く 福岡 津田 富子
末枯や池塘の水へ夕日落つ 高松 佐々木 新
観音の岩山の空鷹渡る 草津 竹内 恵子
ママにだけ解る片言小鳥来る 下関 隅田 雅子
爽やかにゴールド免許返上す 福山 佐藤三重子
十月や夜空に心置く日々を 高松 田中 敏子
空蟬や仮の世生きし証とも 平戸 前田 詠子
白砂に秋の声聞く浦曲かな 芦屋 中村 澄子
嫺やかに風を誘ひて秋桜 穴栗 平瀬 成紀
秋天を抱へきれざる湖面かな 神戸 涌羅 由美
露けしや子規の直筆写生文 吹田 河辺さち子
秋天へ皆窓明けてをりにけり 鳴門 芝 あきを
満月の仰ぐ両手に治まれり みやま 板橋 寿
台風の余波乗り越えてゆくフェリー 大分 野村香代子

白が咲き赤が遅れて曼珠沙華 宇部 萬 洋子
 この先は昔花街酔芙蓉 高知 駒木 基克
 ふたり居てひとりと思ふことも秋 筑紫野 中川 壽朗
 待宵や明日退院といふ窓に 久留米 大日方明美
 投網打つ音も秋寂ぶものとして 大分 竹下百合子
 城苑の日差しを分かつ菊花展 高松 藤川 滋子
 想ひ出はつなぎたきもの種を採る 神戸 小柴 智子
 野菊挿しその人らしき忌日かな 大牟田 岩永美智子
 秋草の中に径あり宇陀の里 柏原 鈴木 輝子
 石段は女の歩幅萩の寺 神戸 松下美年子
 点滴の輝き落ちる秋日和 浜松 藤野 靖也
 父祖よりの一管を守り里祭 名古屋 山口 勝行
 手をつなぐ子の居て花野日和かな 奈良 和田 富子
 お悔みの欄に君の名鉦叩 豊中 大池 敏子
 都府楼の礎石のほてり草紅葉 春日 志鶴 富生

その先に真昼の宇宙天高し 備前 白石 昌弘
 一頼り雲に遊びて今日の月 鹿児島 柳橋 芳子
 蹲踞の暗きを照らす石路の花 広島 山岡早智子
 刻忘れ灯下親しむ旅仲間 神戸 内田 泰代
 秋深し火伏せの宮のがらんどろ 鹿児島 蓑輪ムツ子
 身に入むや友の名のこる電話帳 加賀 谷村 栄子
 御仏も救ひやうなき破れ蓮 福岡 古賀 伸治
 枝折戸の奥の闇より鹿の声 西宮 本郷 桂子
 棟上げや紫苑はゆるく括られて 東京 中井 静子
 小鳥来て弾みし試歩となりけり 芦屋 山岸 正子
 住み古りて四十年の竹の春 綾瀬 鈴木智香子
 穂芒の夕づく重さありにけり 川西 菱野としみ
 露の身に受診予約のまた一つ 高松 三宅 博子
 武士の心に触るる露の庭 岩手 山口 國男
 大空に風のみちあり小鳥来る 倉敷 江原由美子